

男女共同参画社会へ一歩いっほ近づくための情報誌

Pas ā pas

パザパ

No.6
2006.3



特集

困った! どうしよう? 助けて!

対応のしかたから家族の姿が見えてくる

困った!

対応のしかたから 家族の姿が見えてくる

日々の暮らしの中で困るのは、どんな時でしょうか。そんなとき、あなたは、どうしていますか？その対処のしかたから、家族のあるべき姿が見えてくるのではないのでしょうか。ということで、実際にアクシデントが起きたときのことを第1弾のアンケートで調査し、その後更に詳細なアンケートを行い家族の姿(男女共同参画の現実)に迫ってみました。



アンケート

その1

調査時期：平成17年11月

調査対象：男女153人

(女性124人、男性24人、不明5人)

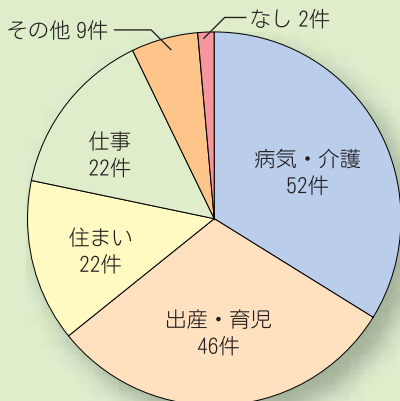
20歳代2人、30歳代37人、40歳代55人、

50歳代40人、60歳代以上19人

問：

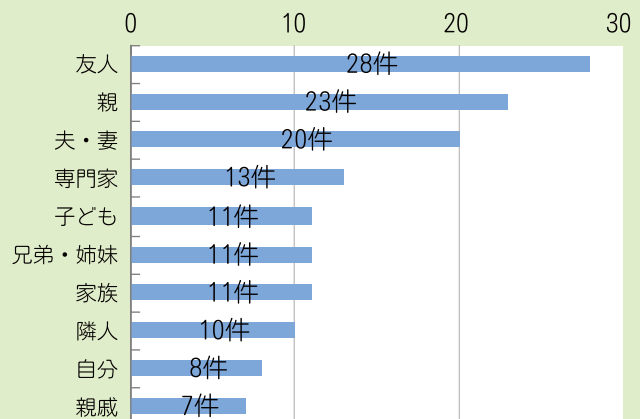
- 1 これまでの家庭生活のなかで直面した大きなできごとや状況の変化は
- 2 そのとき1番困ったことは
- 3 どのような対策をとったか
- 4 そのとき頼りになったのは
- 5 どのようなサポートがあればよかったか

問1 これまでの家庭生活のなかで直面した大きなできごとや状況の変化



住まい：転居、親との同居など
仕事：定年退職、再就職を含む

問4 そのとき、頼りになったのは (複数回答)



※表紙及びこのページのイラストは利根川初美さん

どうしよう？ 助けて！

第1位は病気・介護

問1への解答から、日常の困ったことの第1位は病気・介護。第2位の出産・子育てをあわせると実に全体の2/3にあたります。問3の「どのような対策をとったのか」の答えからは…

- ★子どもにも家事分担 ★遠方の娘に依頼
- ★曾祖父(91歳)が協力 ★遠方の親(高齢)に最終の新幹線で来てもらった
- ★兄弟姉妹でローテーション
- ★仕事を休めない時は従兄弟に頼んだ等々

問4への解答からほとんどの人が、同居の家族のほかに実家の両親、義父母、親戚など、肉親の力を借りているようです。

ヘルパー、施設、民生委員、ショートステイ、デイサービスなど、外部に支援を求めた人もありました。

どうにもならなくて、仕事をやめたり、減らしたり、家政婦が見つかるまでは、毎日病院に泊り込みそこから出勤したという声(男性)もありました。

ひとりで奮闘してしまう

- ★情報不足や取り残され感 ★自由な時間がない
 - ★美容院、買い物、病院に行けない
 - ★自分の体調が悪い時の子どもの世話
- など、病気、介護ほど差し迫ってはいないせいか、我慢してしまうなど、一人で奮闘する様子もうかがえました。

子育てにおいては、身内の力に加えて子育て仲間や友人、近所の人などのつながりも、悩みの解決や精神的な助けになっているようです。

こんなサポートがあれば

問5の「どういうサポートがあればよかったか」の問いに、

- ★子どもを預かってくれるところ ★病児保育
- ★昼間だけでも介護を代わってくれる人
- ★精神的サポート ★緊急介護サービス
- ★食事の宅配 ★病院への送り迎え
- ★急用に対応できるデイサービス、ショートステイ
- ★気軽に相談できる機関 ★職場での理解
- ★制度を利用できる社会のコンセンサス

最近是这样いったサービスが公的にも民間にも増えてきていますが、内容は案外知られていないようです。調べておくことも、いざという時の備えになります。また、「私は頼る人があったが、いなかったらどうなっていただろうと今でも思う」という声もありました。頼れる身近な人とプラスアルファのサポートとして社会的制度が整備される必要を感じます。

悩みを共有できる人

アンケートの中で、意外だったのは、夫の姿が見えてこなかったこと。「頼りになったのは？」の解答では、出産育児でさえ、46人中10人しか夫をあげていません。病気、介護では52人中4人でした。やはりこれは働き方の問題でしょうか。夫はまず外の仕事をいつも通りこなし、その他の人で何とか乗り切る、ということでしょうか。子育てでも、悩みを共有し分かりあえるのは、夫よりも同じことで悩んだり、ノウハウを持っている子育て仲間の方ということかも知れません。

どこにいるの？ 何をしてるの？

家のなかで夫の姿が見えにくい

家庭生活のアクシデント発生時における男性の当事者意識が低い、夫が家族や家庭生活を省みる機会が少ないのではないかと。またその時に夫が頼りになったとする意見が想像以上に少ないのは、夫を頼りにしていないのではなく、職場環境から頼りにできない状況におかれているのではないかと。

そこでバザパではさらに一步踏みこんで、今を生きるオトコたちの生活実態を知るために「妻の目から見た夫の生活」について再度アンケート調査を実施することにしました。

アンケート

その2

調査時期：平成17年11～12月

調査対象：夫をもつ女性141人

(夫が会社員90人、公務員25人、自営業21人、その他5人)

20歳代7人、30歳代56人、40歳代51人、

50歳代21人、60歳代以上6人

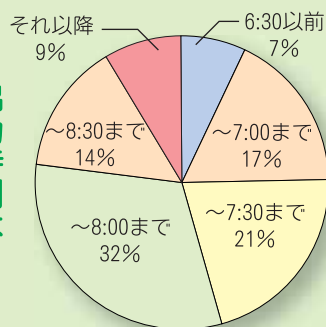
問：

- 1 夫の出勤、帰宅時刻
- 2 休日にも仕事をしているか
- 3 休日に昼寝など休息をとっているか
- 4 夫の家事時間は
- 5 夫との対話時間は
- 6 夫の家庭生活に対する理解度
- 7 夫に理解させるためにしている妻の努力度
- 8 夫の家庭における家事実践度

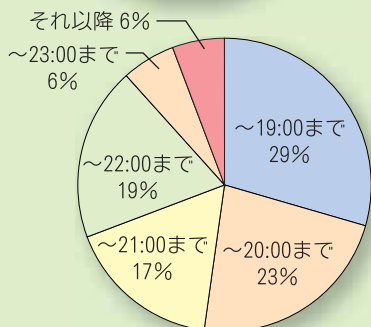
平均点は72点、63点、59点

問1 出勤時刻・帰宅時刻

出勤時刻は？

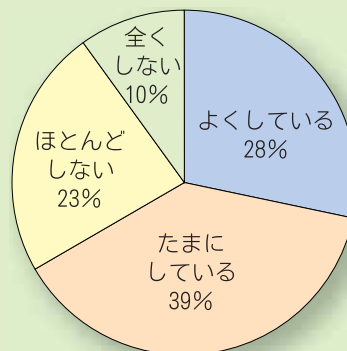


帰宅時刻は？



8時前に出勤する割合が77%。30%以上が21時以降に帰宅。さらに、22時を過ぎるとする割合も12%を占める。1日フルに仕事をしている様子がうかがえる。

問2 夫は休日に仕事をしているか(休日出勤・自宅仕事)



67%が何らかの形で仕事をしている。本当にゆっくりできるのは月にどれくらいなのでしょう。

ちょっと一言…

男性は日々の仕事に追われている。

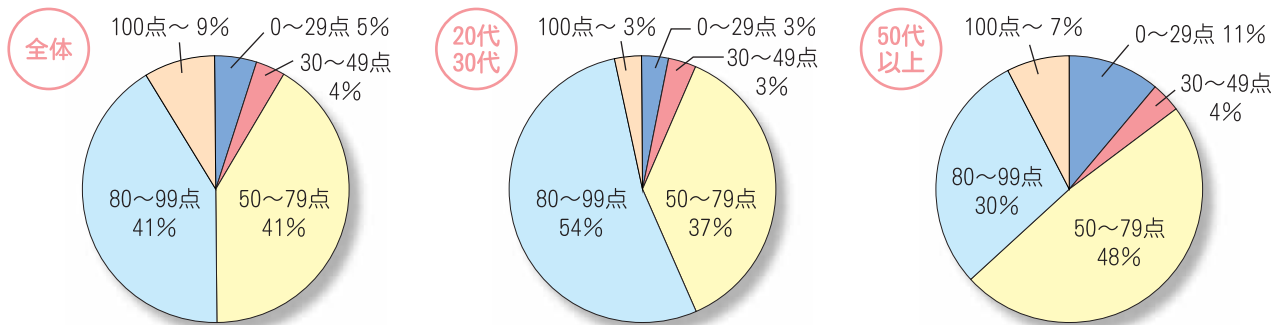
「家事、育児、介護など手伝わなければ」という思いがあっても、現実にはなかなか難しいように見えます。

妻からすると、夫の立場を理解しつつ、それでも不満があるのかも知れません。

職業を持つ女性なら、家庭内の共同参画について対等に話せるかも知れませんが、専業主婦はちょっと弱い立場でしょうか。

夫の理解度は72点

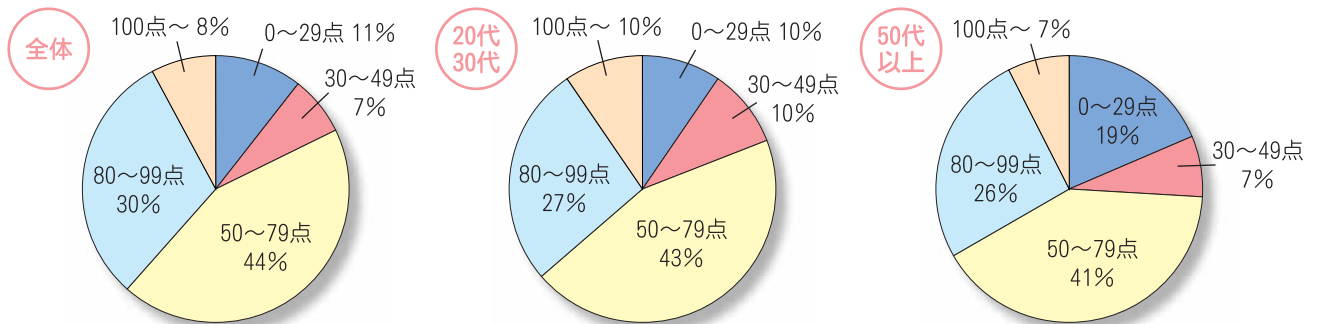
夫は家庭生活のできごとや問題をどのくらい理解しているか採点



全体では5割の家庭で80点以上。困った時には友人ということからするとちょっと意外。これは気持ちが高齢者に向いていけばいいというあらわれか？年代別でみると50歳代以上に比べて20・30歳代の方が理解度が高いという結果になっている。

妻の努力度は63点

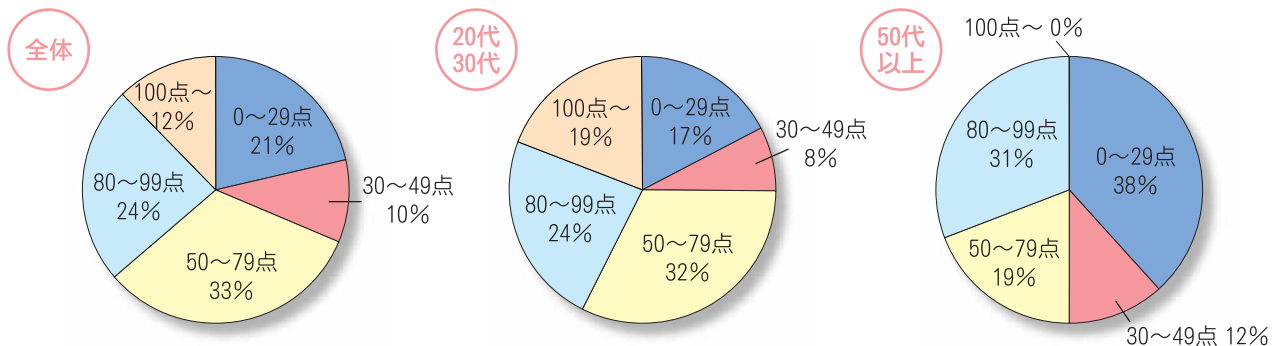
夫に理解させるために妻がしている努力度を自己採点



年代によって大きな差異は見られないが、30点未満とした妻が50歳代以上では20・30歳代の倍という結果。あきらかめがあるのでしょうか？

夫の実践度は59点

夫が家事、育児、介護などを実行する実践度を採点



年代差が顕著。20・30歳代の43%が80点以上と高い評価を受けている。子どもの年齢も低く、夫の参画もみられるが、50歳代以上では子どもも自立した分、父親のサポートはより精神的なものに変わるためとも考えられる。

ちょっと一言… 「夫は仕事をしてくれているから」というコメントがありました。このままだと夫は仕事、妻は家事育児という昔ながらの役割分担に逆もどりしてしまうようにも思えます。

ぐらっ

そのときのために



あなたとパートナーで耐震診断を

アンケートを通して、職場では存在感を誇る男性も家庭での影が薄いことがわかりました。早朝出勤をする人（朝6時台）が全体の約25%、帰宅時間が21時以降になる人が約30%という結果でしたが、休日出勤や仕事を家に持ち帰る人も多い中で、サービス残業は増えているのでは、と推測される結果となりました。

また休日の昼寝の時間と反比例して夫がする（できる？）家事時間は1週間で1時間未満が全体の半数を占め（データは未掲載）、家事・育児に参加しようとするのは、やはりスーパーマンでなければできません。仕事中心の生活を送る夫の姿が浮き彫りになりました。しかし、お互いの理解・努力度は高いという結果が出ました。

社会の豊かさと反対に、家族や夫婦のカタチが変わってきています。将来を見ずして私たちが考えていかなければならないことがあるとしたらそれは何でしょう。

「相手が忙しいから無理な要求はしない」には、仕事に追われる夫への気遣い、優しさが感じられる一方で、子育て、介護、人生の中で越えなければならない大小さまざまなアクシデントは、全部一人で乗り越えてきたという妻たちも多いのでは？「男たちのこれからに期待しよう」「いろいろあるけどお互い理解しあっているから」では、家庭の基礎工事は万全とはいえません。将来に向けて、夫婦がお互いのワーク・ライフ・バランスを念頭においた生活の耐震診断から始めてみませんか。



ふなほけいこ
船橋恵子さん プロフィール

神奈川県出身。静岡大学人文学部社会学科教授。

専門分野：ジェンダーの比較社会学。

公的活動：富士市男女共同参画審議会会長

(平成16年7月～)

国立女性教育会館「家庭教育に関する

国際比較調査研究」プロジェクト委員

(平成16年～17年)

日本家族社会学会理事(平成16年9月～)

※日本とフランス、スウェーデンで行った家族調査の結果をまとめた『育児のジェンダーポリティクス』を近刊予定。

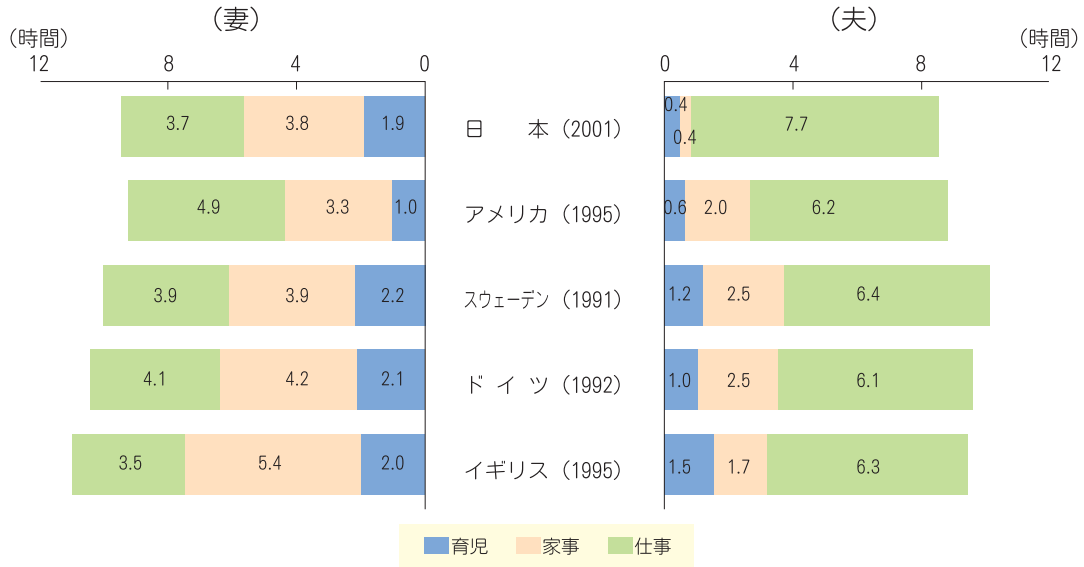
それに、思い切ってやってみようと、意外と道がひらけることもありますね。意識の上では、「仕事もするけれど家庭のことも大事」という男性が多数派ですから、条件さえ整えばそうなり得ます。まだ理想の形とはいえませんが、スウェーデンは、それに近づいています。統計によると、女性はパートタイムで働き、家事をより多く担い、男性はフルタイムで働き、ある程度家事を担っているのです。労働時間は同じでも、仕事と家事の比率が違います。それでも夜7時に帰宅し、夕食を作る管理職は珍しくありません。日本でも、20年後にはそんなかも知れません。

ワーク・ライフ・バランスを実践しているパイオニアとして、素敵な生き方をしている人を紹介するとか、多様なライフスタイルがあるという刺激情報が流れることも必要ですね。そうすれば、男女共同参画が「今でさえ忙しいのに」ではなく、「もっと気持ち楽になり、生活が楽しくなる方法」だと捉えられるのではないのでしょうか。

アクシデントは、むしろいいチャンスかもしれません。子どもや妻の病気は、仕事の足を引っ張る要因かも知れませんが、それによって、長い人生をより豊かに、より楽しく生きる道に気づくかもしれない・・・という視点を大事にして欲しいものです。

平成15年度 内閣府男女共同参画白書から

育児期にある夫婦の育児、家事及び仕事時間の各国比較



(備考) OECD「Employment Outlook」(2001年)、総務省「社会生活基本調査」(平成13年)より作成。

静岡大学 船橋先生にうかがいました

アクシデントはむしろチャンス

とても面白い調査というのが第一印象です。夫の家事参加度は、妻が仕事を持っているかどうかで決定的な違いがあるので、それぞれを分けて集計したり、また、アクシデント内容ごとに調べれば、もっと興味深いものになると思います。

夜8時に帰宅した人でも、役割を自覚していれば子どもを風呂に入られるし、介護にも関わられますね。「忙しいからできない」とは、必ずしも言えないのではないのでしょうか。夫の実践が伴っていない理由には、家庭内での妻が対処するという、強い役割分担意識があるのではないかと思います。

全国調査では、「男は仕事、女は家庭」を否定する人が多数派になったように見えますが、意識と行動は全く違います。行動は、ゆっくり後を追いかけていくのが常。その乖離を縮めていくのがこれからの課題です。

男女共同参画というところ、「女性も仕事を持つ」という部分と「男性も家庭のことをやる」という両面がありますが、これが両輪として回らないと難しいでしょう。役割を固定しておいて、「仕事が大変、家庭が大変」というのではなく、役割を複合化してバランスをとっていくことが大事ではないでしょうか。

国が制度をつくり、企業も動かなければだめです。仕事と家事・育児の問題の改善は、個人の努力には限界があり、社会システムの充実が不可欠です。しかし個人も、大変でしょうが、ただ依存するだけではなく、地道に努力をしていくこと。これもまた両輪といえますから、バランスよく動くようにしたいですね。

スウェーデンでもフランスでも30年前は、女性の労働市場への進出が進む中で、性別分業意識が変わらないという、現在の日本と似たような状況でした。しかし制度が変わり、意識と行動が変わって、今に至っています。ですから、日本も変わっていくと思います。

静岡発！ 女性ビジネスフォーラム

第1部 パネルディスカッション

「女性が元気なまちの実現に向けて」

(SOHOしずおか主催)

パネリストの片山さつきさん（経済産業大臣政務官）、藤沢久美さん（シンクタンクソフィアバンク副代表）のお話を、野村浩子さん（日経ウーマン編集長）がコーディネート。

男社会の財務省で常に自分の位置を確認しながらキャリアアップしていったことや、起業を見ずえてそれに役立つ仕事に没頭したなど、お二人の経験を交えながら、ビジネスや政治の場で女性がリーダーシップを発揮していくため、求められる社会の仕組みや人々の意識の改革について、様々な角度から議論が交わされました。

第2部 第1セッション

「SOHOしずおか発

ビジネススタイルは自分でつくる」

(SOHOしずおか主催)

「スポーツ弁当」の古旗照美さん（オフィスしょくスポーツ代表）と「だっこひも」の園田正世さん（北極しろくま堂(有)代表取締役）による対談。

家庭を持ちながら起業し、想像を超えるビックビジネスに発展させたお二人から、顧客のちょっとした一言からニーズをつかんだり、クレームへの対応によって信頼を得た経験など、ビジネススタイルを築く上でのヒントが披露されました。

情熱、オリジナリティ、責任を持ち続けること、SOHOしずおかでのネットワークを活用など、起業を目指す女性に対してのメッセージも伝えられました。

第2部 第2セッション

「女性のチャレンジ支援トーク

ーもっとビジネス！さらなるビジネス！ー

(NPO法人世界女性会議ネットワーク静岡主催)

コミュニティビジネスやアグリビジネス、様々な分野でチャレンジする4人の女性から、NPO法人化によって既存組織が活性化したことや、女性の活躍で地域が盛り上がった例など、実体験を通じた報告が熱く語られました。

これを受けて、企業経営者など4人の先輩ゲストからは、「専門家としての専門性が重要」との指摘もあり、会場全体で、経営力、ビジネス力をアップして、事業を発展させていくための方策について考えました。

国の第2次男女共同参画基本計画（平成17年12月改定）における重点項目として「女性のチャレンジ支援」が掲げられ、その柱の一つとして女性の起業という視点がクローズアップされています。

こうした状況のなか、平成18年3月4日（土）、静岡県SOHO推進協議会、静岡県中部地区SOHO推進協議会（SOHOしずおか）では、創業しやすいまち、女性が元気なまちづくり、そしてそのためのネットワークづくりをめざし、NPO法人などとの協働のもと、「静岡発！女性ビジネスフォーラム」を開催しました。



野村さん

片山さん

藤沢さん

第2部 第3セッション

「女30代 ワーク&ライフバランスを見つけよう」

(NPO法人男女共同参画フォーラムしずおか&Win-Winプロジェクト主催)

小国綾子さん（毎日新聞記者）と橋本恵子さん（Win-Winプロジェクト）によるトークセッション。

小国さんからは、「子どもが生まれて、世界が広がり、逆に自分の時間が持てるようになった。子育ては、たいへんなことばかりでない」というお話や、メディアの発信者側に女性が増えることの重要性などが語られ、後段では、地元マスコミで活躍する女性たちの体験談が披露されました。

また、育休を支える代替の非正規雇用者の処遇についての質問に、「正規雇用は増えない時代なので、非正規雇用者の均等待遇をどこまでつかめるか、それぞれのワーク・ライフ・バランスを見ずえて、今が頑張るときでは」との応答もなされました。



第3セッション

第3部の交流会（TEA PARTY）では、

出演者と参加者がお茶を片手に歓談し、それぞれのネットワークを伸ばしました。

ライフコーディネート静岡

人が持ち合わせている知識や技術をコラボレートしていけば、活動分野はどんどん広がって行く…。静岡県主催のNPO市民大学院を受講したメンバーのこんな会話から生れた市民活動団体です。



会の名前にあるように、私たちの使命は、市民の"ライフ" (様々な生活様式) の中に、コミュニケーション豊かな、明るい地域社会の構築に役立つ活動をコーディネートさせていただくことです。メンバーは現在、女性6人、男性5人。企業や行政職を定年退職した人、教育者、主婦など様々で、各人が持てるパワーをフルに発揮し合って、活動を進めています。

男女共同参画社会を実現していくためには、まず、市民や民間団体が、自らの問題としてとらえ、積極的に取り組んでいく姿勢が大切。そこで実施している活動が、中学生を対象にした男女共同参画特別授業です。感受性が強い中学生の時期に、性別による固定的役割分担意識を検証しながら、

自分の力で"人権" "ジェンダー" について考えていくきっかけをつくれるようにとカリキュラムを編成し、市内の中学校に働きかけました。

その結果、平成17年の10月から11月に、蒲原町蒲原中学校と清水第七中学校の2年生5クラスの家庭科の授業として組み入れてもらうことができました。

テーマは"何だろう、自分らしい生きかたって"。男女の役割が入れ替わったドラマ仕立てのビデオを鑑賞の後、5～6人のグループごとに感想を話し合い、意見発表します。「私たちが大人になったら、男だから、女だからという固定化された考えを無くしてもらいたい。」「男女平等、女性が働きやすい環境をつくるには、社会や行政が動くべき。」こんなシビアな意見発表もありました。アンケート調査で、ジェンダーという言葉を知っていた生徒は、1.2%でした。

私たちの武器は、メンバーのフットワークとキャリアで培った知識、人脈、ノウハウをコーディネートしていくことです。生きがいのある市民生活の創造と明るい地域社会の構築にお役に立てばと願っています。

ライフコーディネート静岡 **会員募集中**

あなたのキャリア、知識、知恵、そしてやる気、元気を遊ばせていませんか。

● 主な活動 ●

平成16年度 静岡市協働事業

「いきいき市民講座」実施

平成17年度 学校向け出前授業実施

連絡先：(054)282-5885 坂東方



出前講座

企業へ 学校へ 地域へ

静岡市では、男女共同参画について市民の皆さんにご理解いただき、その推進をはかるため、企業、学校、地域などへ出かける"出前講座"を行っています。内容も、受講者も、講師もいろいろのこの講座。本年度実施したものを紹介します。

その1 企業出前講座

「男女共同参画を本当に理解するために」

講師：静岡県立大学 犬塚協太助教授

対象：社会保険診療報酬支払基金労働組合静岡支部組合員
(102人)

その2 学校出前講座

①「豊かなセクシュアリティ」

講師：ハートブレイク思春期研究所 黒瀬清隆所長 ほか

対象：静岡市立籠上中学校3年生 (177人)
静岡市立賤機中学校2年生 (140人)
静岡雙葉中学校2年生 (179人)

②「思春期における体と性の発達」

講師：静岡市女性会館相談室 柴田靖代健康相談員

対象：静岡市立清水入江小学校生徒保護者 (20人)
静岡市立竜南小学校生徒保護者 (45人)
静岡市立清水不二見小学校生徒保護者 (44人)
静岡市立横内小学校生徒保護者 (30人)

その3 教職員研修(市教育センター共催)

①「男女共同参画の観点から学校教育を考える」

講師：静岡理工科大学 秋山憲治助教授

対象：静岡市立小・中学校新任教員 (52人)

②「男らしさ、女らしさから、自分らしさへ」

講師：静岡英和学院大学 片居木英人助教授

対象：静岡市立小・中学校事務員 (120人)

その4 市政ふれあい講座

「どうなる21世紀の男と女」

講師：静岡市男女共同参画課職員

対象：静岡市清水船越公民館女性学級 (64人)
静岡市清水両河内公民館女性学級 (30人)
静岡市婦人団体連絡会伝馬町地区 (40人)
本の会 (12人)
静岡市清水NPO・ボランティア市民センター講座 (45人)



● 実施後のアンケートから ●

- ★ジェンダーについて考えるよい機会になった
- ★今までの考え、慣習を改めて考えたい
- ★正直あまり興味がない
- ★子どもたちには小さいうちから、こつこつ教えていく必要がある
- ★言葉からイメージして理解したつもりでいた
- ★男女差も認めながら共に尊重していきたい
- ★チャンスの平等を意識すれば男女共同参画は難しくない
- ★思春期を迎える子どもとの関わり方について、心構えが出来た
- ★自分の体や性について知らないことが多かった

こうした出前講座は、平成18年度も引き続き実施していきます。
お問い合わせは市男女共同参画課 (054-221-1349) まで

シリーズ 男女共同参画の視点で選ぶ絵本 本の会による

今、自分の仕事に誇りを見だし、アイデンティティを確立する女性が
増えています。女性が『仕事』を続けるためには、周囲と認め合える
関係を作ることが必要です。

そのためには、男女に関わらず同等の視点に立った意識改革と社会
整備が大前提になります。

今回の絵本は、平安の昔の固定観念にとらわれない好奇心旺盛な姫
ぎみと、まじめに働き続ける女性の生き方を通して、アイデンティティを
見失わないことの大切さを教えてくれます。(柳井登志)

●本の会●

平成10年、静岡市で初め
て誕生した学校司書のグ
ループ。

以来8年間、自主的に勉
強会を継続。

『虫めづる姫ぎみ』

森山京：文 村上豊：絵 ポプラ社 2003年

女性会館図書コーナー、中央、御幸町、南部、北部、西奈、長田、清水中央、興津図書館所蔵



とても個性なお姫さまのお話です。気味の悪い毛虫が大好
きで、小箱に集めては成長する様子を見るのが楽しみ。両親に
注意されても、「ものごとは原因と結果を見きわめてこそ、お
もしろいのです。」と言り返す。そして自分の身だしなみも全
然気にせず、自然のままできて、すだれから出て近所の男子
達と虫集めに夢中です。

平安時代後期の「堤中納言物語」に収められている物語の一
つですが、男性中心の貴族社会の中、おしとやかな美しい姫ぎ
みのお話が多い中で、世間体を気にせず、自分の思うがままに、
たくましく生きていく魅力的な姫ぎみの話を書かれたのは一体、
どんな人だったのでしょうか？女性？男性？女性の場合は自分
の願望だったりするのでしょうか。話の背景を想像するのも楽
しいですね。(栗田秀美)

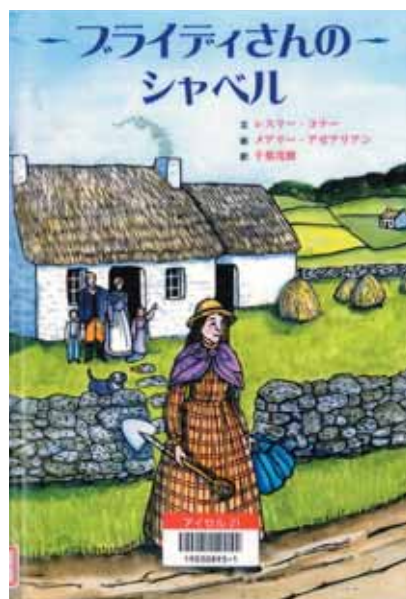
『ブライディさんのシャベル』

レスリー・コナー：文 メアリー・アゼリアン：絵 千葉茂樹：訳
BL出版 2005年

女性会館図書コーナー、中央、南部、西奈、清水中央、興津図書館所蔵

1800年代半ば、ヨーロッパからアメリカに移住した一人の女性の物
語です。希望と不安がいっぱいの旅の道連れに彼女が選んだのは、一
本のシャベルでした。帽子屋の仕事を見つけた彼女の日常生活はシャ
ベルと共にありました。花の苗を売るために花壇を作ったり、雪かき
をしたり…。結婚して子どもができてからも、家畜の囲いのための穴
掘りや、畑作、かまどに石炭をくべる等、シャベルは大活躍です。

順調にみえた結婚生活ですが、ある日、落雷により納屋が全焼、大
事なシャベルも壊れてしまいます。やり直せないくらいのダメージで
したが、彼女はあきらめませんでした。シャベルを直し、また日々の
暮らしを始めていくのでした。彼女の一生を支えていった一本のシャ
ベルの存在は、地味ですが、大地に足を根ざした暮らしの大切さと、
飾りものではない、自立した女性としての生き方を選んだブライディ
さんの覚悟まで伝わってきます。(宮城久美子)



発行 / 静岡市総務局企画部男女共同参画課
企画編集 / 市民編集スタッフ 市川久二子・久保田さきの・杉谷敦子・中嶋三子
〒420-8602 静岡市葵区追手町5番1号 ☎054-221-1349

http://www.city.shizuoka.jp/
E-mail:sankaku@city.shizuoka.jp ●ハザハ第6号のご感想をお寄せください。